



写真-1 初秋の天満大池（南池）（平成24年8月撮影）

### ■ 高燥の地・印南野台地を潤す天満大池

兵庫県は日本一溜池の多い県で、その総数は令和7年3月時点で約21,000箇所ですが、稲美町六分一（ろくぶんいち）にある天満大池は記録が残る県下の溜池の中で最古の溜池といわれています。

皇極3（644）年に高燥な印南野台地の開発が始まり、これを受けて多くの溜池が築造されました。国安天満神社の古文書に、天満大池の原型とされる「岡大池」は白鳳3（675）年の築造と記されているそうです。

また、「六分一水利委員会」が所蔵する寛文6（1666）年に描かれた絵図面（写真-2）によると、江戸時代には「蛸草（たこさ）大池」と呼ばれ、水争いが絶えなかったそうです。

池の規模は、明和元（1764）年の「六分一村明細帳」によると、広さが東西350間（≒636m）、堤長903間（≒1,642m）、堤防は、根置（敷幅）10間（≒18m）、馬踏（ばふみ：天端幅）4間（≒7.3m）で、水源は明石郡神出（現・神戸市西区神出）の天王山（雌岡山）からの水を集めた「手中流<sup>※1</sup>（てなかりゅう）」となっています。

いつ頃から「天満大池」と呼ばれるようになったのか、記録が残っていないので定かではありませんが、蛸草郷六ヶ村<sup>※2</sup>が明治21（1888）年4月に合併し「天満村」となったとき、村の名をとって「天満大池」と呼ぶようになったのであろうと言われています。

※1「流」：溜池掛りの取水用の水路（小河川）。

※2 蛸草郷六ヶ村：岡・六分一・森安・国安・中村・北山の六ヶ村。因みに、現存する日本最古の溜池は、『古事記』や『日本書紀』にその名がでてくる大阪府狭山市の「狭山池」といわれている。昭和63（1988）年の改修に伴う調査によって発掘された遺跡から、7世紀前半に築造されたことが判明している。平成の大改修により、かんがい目的に治水機能が付加されている。



写真-2 蛸草大池絵図面（「ため池整備事業 天満大池地区」パンフレットから引用）

## ■ 「手中流」を巡る水争いの歴史

天満大池の水源である「手中流」は、田畑を潤す水、人々の暮らしを支える水として、蛸草郷の人々にとってまさに命の水でしたが、それだけに、古くから水争いが絶えませんでした。

江戸時代初期の元和 7 (1621) 年に、手中流を巡って藩を越えた水争いが起きています。

明石藩側が神出庄に新池(手中池)を築いたため、下流の蛸草郷 6ヶ村が明石藩に訴えて、これが認められています。

藩を越えた訴えが容易に運んだのは、姫路藩主・本多忠政と明石藩主・小笠原忠真が義理の父子関係にあったからといわれています。この時、手中池は堤の真ん中を切られたことから、「手中切池」と呼ばれるようになったとか。

以後、寛文 6 (1666) 年、寛文 10 (1670) 年、元禄 4 (1691) 年、元禄 9 (1696) 年にも水争いが起きています。



写真-3 水争いの舞台となった手中池

また、野谷新村・草谷村と蛸草郷の間でも、手中流を巡って

水争いが起きています。手中流の水は蛸草大池と草谷村に分水されていましたが、このことについて元文 5 (1740) 年に訴訟となり、手中切池の下、およそ 50m 地点に分水石を伏せて双方に分水するなどの取り決めがなされました。ところが、宝暦元 (1751) 年 6 月、蛸草郷岡村の手によって堰が切り破られたことから水争いが再燃し、結局、宝暦 4 (1754) 年、手中流の堰床に横 2 間 2 尺 (≒4.2m) の堰を設け、草谷村の溝口は 1 間 (≒1.8m) とする分水ルールが定められています。

ところで「手中切池」ですが、今は切られた堤が復旧され、水争いもありません。明治 24 (1891) 年に完成した「淡河川疎水」が、その背景にあると思われます。

「淡河川疎水」は既得水利権に割り込む形になるため、当時は、既得水利に支障をきたさないよう非かんがい期(9/20~5/20)しか取水が認められませんでした。そこで、非かんがい期に水を十分に溜めておく必要から溜池の拡張や新設が行われています。手中切池堤防の復旧もこの流れの中で行われたと思われます。

池の西にある「手中池頌徳碑」には、明治 25 (1892) 年 9 月起工、明治 27 (1894) 年 10 月竣工と刻まれていて、タイミングはピッタリです。今「淡河川疎水」は、後にできた山田川疎水と合流して、天満大池にも注いでいます。

## ■ 五穀豊穡と池の満水を祈願する天満神社秋祭りと水上神輿渡御

天満大池のすぐ北に天満神社があり、毎年 10 月の秋季例祭には水上神輿渡御が行われます。

この本宮のメインイベントは 14 時頃から始まります。「十六人方」と呼ばれる担ぎ手が神輿を担いで社殿を一周した後、神輿を池に投げ込みます。神輿に続いて担ぎ手の若者も次々と池に飛び込み、神輿を担いで 3、4 回浮き沈みさせ五穀豊穡と池の満水を祈願します。その後、神輿を引き上げて社殿の周りを一周し、また神輿を池に投げ込みます。この“みそぎ”を 3 回繰り返し御旅所へ向います。その他、獅子舞奉納や屋台練りも行われるそうです。



写真-4 担ぎ手は神輿を池に投げ込む



写真-5 担ぎ手も池に飛び込み神輿を担ぐ



写真-6 投げ込んだ神輿を担ぎ上げる

### ■ 菅原道真ゆかりの地

天満神社は、菅原道真公が西遷の途中立ち寄られたとのことから主神を天満天神としています。学問の神様なので、社殿の周囲には合格祈願の絵馬がたくさん吊り下げられていました。



写真-7 天満神社境内にある菅原道真公の歌碑



写真-8 天満神社

東風吹かば 匂ひおこせよ 梅の花

あるじなして 春な忘れそ

春風が吹いたら、匂いを（京から太宰府まで）  
送っておくれ 梅の花よ  
主人（菅原道真）がいないからといって  
春を忘れてはならないぞ

## ■ 準絶滅危惧種「アサザ」の復活と保全活動

天満大池には、万葉の歌にまで詠まれた美しい水草「アサザ」(写真-9・10) が生育しています。

アサザはミツガシワ科の多年草で、地下茎をのばして生長し、スイレンに似た切れ込みのある浮葉をつけ、夏から秋にかけてキュウリの花に似た黄色の花を咲かせます。万葉名は「あざさ」といい、古語の「あざふ(もつれるという意味)」から来ていて、水中に伸びる長くもつれ合う茎の状態からついた名前です。

環境省のRDBで絶滅危惧Ⅱ類でしたが、平成19(2007)年の改定の際に準絶滅危惧種にランクダウンしています。また、兵庫県版RDBではBランクです。

アサザは河川の氾濫原に生育するもので、天満大池は元々喜瀬川の氾濫原だったそうです。

昭和60(1985)年頃まで天満大池に自生していたアサザは、公園造成工事の際の浚渫によりその姿を消し、一時は絶滅したものとされていました。しかし、溜池改修工事に伴う池干しで古い種が芽吹いたのか、平成8(1996)年頃より少数ではありますがアサザが見られるようになりました。

平成10(1998)年以降、アサザの自生域にアソラ<sup>※3</sup>をはじめとする外来種が繁茂し、アサザの生育環境が悪化したため、平成11(1999)年度から、天満大池土地改良区や自然保護グループ、行政が外来水草の駆除作業を始めました。年を経るにつれて周辺住民も加わり、アサザの保護と天満大池の水辺環境保全の機運が次第に高まってきました。

平成15(2003)年7月に「アサザを育む会」が発足し、アサザの保全活動が現在も続けられています。

平成24(2012)年9月2日に開催された「アサザ祭」の時は、天満大池の水面のかなりの部分をアソラやヒシ<sup>※4</sup>が占有していて、肝心のアサザはわずかしき見られず、花も数えるほどしか咲いていませんでした。

ところが、平成24(2012)年10月7日の「秋祭り」の日は、水面を覆っていたヒシがほとんど見られず、以前は見つからなかったアサザが、ところどころに確認できました。

ヒシは、「花後には水中に沈んで果実を形成する」そうで、10月の声を聞いて沈んでしまったようです。

**※3 アソラ**：別名アカウキクサ。浮遊性の水草で、水田や湖沼などに生育する。水田や湖の水面を覆う雑草として扱われる一方、合鴨農法でアイガモの餌や緑肥として用いられることもある。アソラがアサザを覆うように繁茂し、光が遮断されるとアサザは衰退する。

**※4 ヒシ**：全国の湖沼で最も普通に見られる水草で、池底に沈んだ種から茎を伸ばし、水面に葉を広げる。葉柄は膨らんで空気を含み、浮き袋となっている。6月頃から晩夏まで次々と白い小さな花をつけ、花後には水中に沈んで果実を形成する。



写真-9 アサザの花



写真-10 アサザの花(天満大池横の喜瀬川にて)



写真-11 天満大池取水口横の喜瀬川



写真-12 天満大池(南池)



写真-13 ヒシとアソラ

## ■ 天満大池の土砂溜め機能をもつ「新仏池」

写真-1 の絵図面に「砂溜」と書かれている池があります。これが、喜瀬川の川池となっている新仏池（しんぶついけ）です。

印南野地は南西方向に傾斜した土地で、川の流れも速く、洪水時には多くの土砂も運ばれてきます。そのため、天満大池のすぐ上流にある新仏池に土砂溜めの機能を持たせているそうです。先人の知恵ですね。

池の諸元は、堤高 3m、貯水容量は 52 千 m<sup>3</sup> で、管理者は岡土地改良区です。因みに天満大池および河原山池の管理者は、天満大池土地改良区です。



写真-14 ゲートの向うが新仏池

## ■ 天満大池を突っ切るバイパス工事が進行中

以前、この記事を書いたのが平成 24 (2012) 年 11 月なので、それからすでに 15 年近くが経過しています。この間に大きく変わったのが二つあります。一つは天満大池のすぐ上流にある新仏池ですが、いつの間にか埋め立てられています。

今一つは、主要地方道 84 号宗佐土山線のバイパス（天満大池 BP）工事が進行中ということです。この事業は、狭小幅員を解消し円滑な自動車交通を確保するなどを目的として、延長 960m、4 車線・両側歩道、全幅 25m の道路を整備するものです。平成 27 (2015) 年度に着工して、現在、天満大池（北池）を突っ切る形で橋梁の下部工事が進められています。完成予定年度は令和 12 (2030) 年度とか。

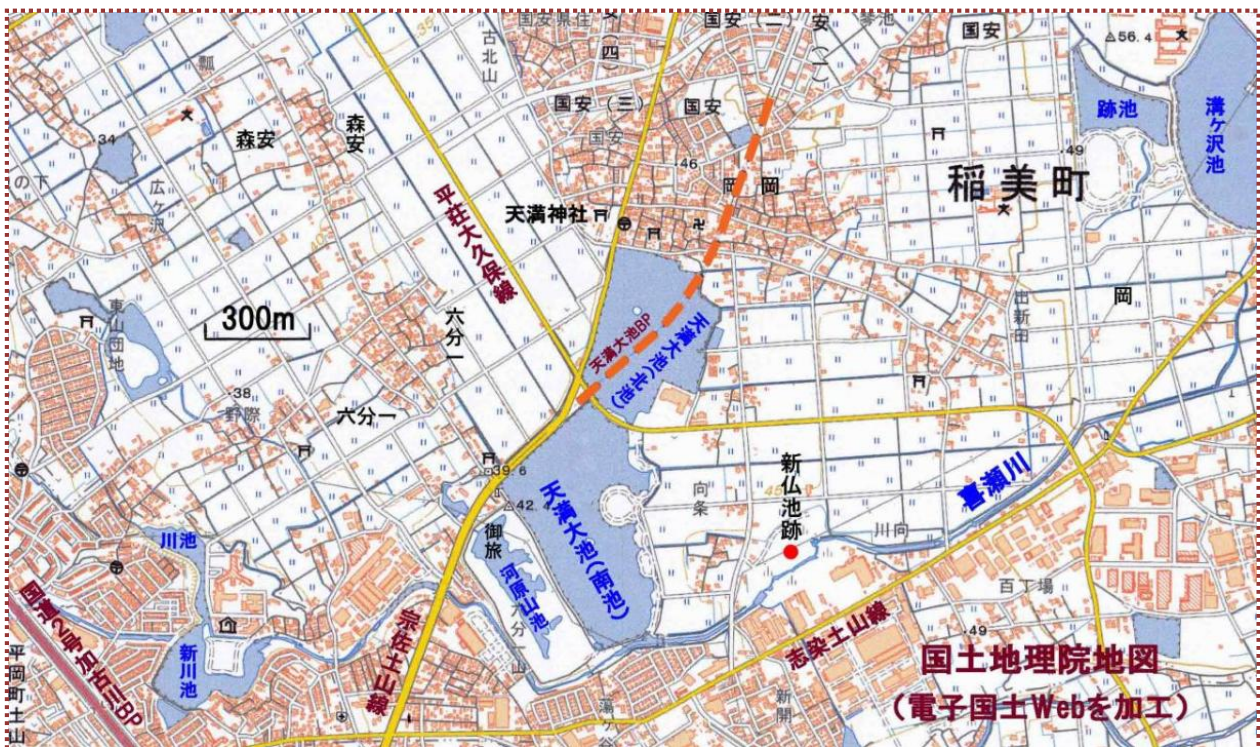


図-1 天満大池周辺の地図

## ■ モノローグ

その昔、印南野地を開発するために、天満大池を皮切りに次々と溜池が築造されました。しかし、水の絶対量が少ないため、日照が続くと必ずといっていいほど水争いが起き、時に流血騒ぎになったこともあったとか。このような「水に対する執念」ともいうべき思いが、やがて「淡河川疎水」や「山田川疎水」の建設へ、さらには、「淡河川疎水」完成から約百年後の「東播用水」完成へとつながっていきました。

天満大池は、昭和 60 (1985) 年から平成 15 (2003) 年にかけての大改修をへて現在の姿になり、総貯水容量 47 万 6 千 t、かんがい面積 193.5ha、満水面積 34.6ha で、加古大池に次ぐ県下第 2 位の面積を誇っています。

平成 22 (2010) 年 3 月に農林水産省の「ため池百選」に選定されました。



写真-15 意外と可憐なヒシの花



写真-16 昭和 57 年以前の天満大池の空中写真（『稲美町史』より引用・加工）

【参考資料】

- 1 『いなみ野台地を潤す“水的路”～淡河川・山田川疎水記録誌』 いなみ野ミュージアム運営協議会 平成 22 年 3 月
- 2 『稲美町史』 稲美町史編集委員会・稲美町 昭和 57 年
- 3 『兵庫のため池誌』 兵庫県農林水産部農地整備課 昭和 59 年 3 月
- 4 『ため池整備事業（大規模）天満大池地区パンフレット』 兵庫県三木土地改良事務所
- 5 『東風吹かば にほひをこせよ 梅の花』 世界の民謡・童謡 HP  
<https://www.worldfolksong.com/calendar/japan/kochifukaba.html>
- 6 『令和 6 年度投資事業評価調書～主要地方道 宗佐土山線・天満大池 BP』 兵庫県土木部道路街路課

※発行：平成 24（2012）年 11 月 『ひょうご水百景』 No.18  
 改訂：令和 8（2026）年 4 月 『ひょうご水百景』 No.18